

インドネシアの歌(4)

民謡と踊り編

ポチヨポチヨは ナツメロ民謡の救世主

民謡やナツメロが忘れられようとしているが、「捨てる神在れば、拾う神在り」。最近ではパーティの後なんかでテーブルや椅子を脇に押しやり皆で賑やかに踊りだすのが普通。これが Poco-Poco のリズムである。一時期ナイトクラブで流行ったジルバ、ゴーゴーとはちょっと違って、ムラユ文明の要素である歩きが入っている。歩きながらボックスで踊る。ステップを覚えれば楽しい踊りである。音楽史の面からみればかなり新しいジャンルであるが、このポチヨポチヨに最近ではインドネシア民謡のメロディが使われ始めてきた。

ポチヨポチヨは少し早めのテンポに合わせて 1 人ひとりが自分の周囲のスペース内で踊る。メロディはもうどうでもよく、リズムに乗れば人の領域にまで足を運んで踊りまわることができる。ここに懐かしのメロディが生きかえったのである。妖しくも物悲しいアチェの民謡「Bungon Jeumpa」がポチヨポチヨのリズムで演奏されれば、もうそれがポチヨポチヨになっている。

インドネシアで入手したポチヨポチヨのテープの中に Yamko Lambe Yamko(イリアン民謡), Soleram(リアウ), Jali Jali(ジャカルタ), O Ulate(マルク), Oina Ni Keke(スラウェシ), まだ曲名を知らない民謡(米の Red River Valley の盗作まがいの曲), ダンドウットの Sembako Cinta から既にナツメロになっている米国の O Carol まで歌付きで入っているのを聞いたとき、驚くと共にうれしくなってきた。こうして美しいメロディがポチヨポチヨの踊りと共に新しい世代の耳に入り、そして残るからである。

実は、ラグラグ会も似たようなことをしているのである。インドネシアのナツメロのリズムであるクロンチオンは我々の手には重過ぎる。ゆったりとしたクロンチオンのテンポでは上手く歌えない。本場に行ったラグラグ会員、音楽に関してはラグラグ会随一の知見をもった会員なのであるが、本場のクロンチオンの伴奏で Bengawan Solo を歌うのに大汗をかいたと述懐している。そのような歌を我々、ただ好きなだけという一般メンバーが歌えるはずもなく、リズムやテンポを歌いやす



いように調整して歌っているのである。古いメロディをポチヨポチヨのリズムにするのも、歌い難い古いリズムを歌いやすいように新しいリズムにして歌い継ぐのも決して邪道ではなく、将にリヴァイバルを実行していることなのです。今後色々の民謡のメロディがポチヨポチヨのリズムに乗ってインドネシア中で聞かれるようになるであろう。民謡だけではない、ナツメロもポチヨポチヨのリズムで復活してくるだろう。

さて、民謡と踊りは切っても切れない関係にある。日本でいえば、雅楽と舞、酒席と芸者、庶民の盆踊り。お隣の朝鮮半島では太鼓叩いて歌い踊り、フィリピンのバンブーダンスは皆さんもご存知の通り。足に鈴をつけて賑やかに踊るヒンズーのカタック、西欧諸国ではフォークダンスが各地方で独自の発達をしている。大抵の方が一度は踊ったことがあるだろうフォークダンスのオクラホマ・ミキサヤやマイム・マイムもそれぞれアメリカ、イスラエルの民謡である。情熱的なフラメンコも然り。

しかし、残念ながらラグラグ会にはこの踊りの部分がない。インドネシアの代表的な踊りはジャワの宮廷舞踊、バリのレゴンやケチャのような悪霊退散の踊り、仮面ダンスのトペン、さらに踊りではないがワヤンも含めるとして、このような高尚な芸術は伝統的なインドネシア音楽、ガムラン・ジェゴグ・ドゥグンといった音楽で伴奏し、歌の部分は口伝で伝えられるダーランの分野であり、我々ラグラグ会の出る幕はない。無論、庶民の踊りは在る。ラグラグ会がそのような歌の採譜が出来ていないだけである。

アチェで踊り子が一列に座って手で膝や肩や腕などを叩く踊りや客を歓迎する踊り、Potong Padi という曲もマレーダンス風の振り付け、イリアンの Yamko Rambe Yamko はあのリズム感から、皆で手を振り足を踏み歌いながら踊るマオリダンスと似た踊りがあると思う。カリマンタンにも、スラウェシにもインドネシア全土に踊りはある。ただ、実はどの民謡がどのように踊られているのか実証不足なのである。テレビなどで見るインドネシアダンスの伴奏曲には知らない曲が多い。バリの歌にいたっては歌える曲すらない。

このことはインドネシア音楽の博物館を目指すラグラグ会にとっての今後の課題でもある。(渡辺重視)